

## E. 行動科学のアプローチを用いた質の高い食生活の実現に向けた研究開発

### 1. 事業概要

本課題で創出される研究成果はこれまでにない新しい技術や用途等であるため、まずは消費者等に正しく認知してもらうことが極めて重要である。このため、これら新しい技術や用途等について、パーセプションギャップの解消を図るとともに、本課題の研究成果を活用しつつ食の二極化に対応した食習慣の改善に貢献する研究開発を行う。

### 2. 研究開発項目

#### (1) 行動科学のアプローチを用いた質の高い食生活の実現に向けた研究開発

##### ① 具体的内容

##### a. 生産・流通・消費における科学技術活用パーセプションギャップ解消

本課題では、新たな育種手法の一環としてゲノム編集等新興技術の活用、下水汚泥資源や家畜排せつ物の肥料利用といったおよそ食品とは真逆に位置する産物の食品生産利用などの成果が期待される一方、その活用には消費者等に正しく認知してもらうことが極めて重要。他方、このような新しい技術や用途等については、消費者等の誤認もあることから、パーセプションギャップの解消に貢献する手法の開発を行う。

##### b. 多様なタンパク質を選択できる食生活の改善に向けた手法開発

食行動の構造に目を向けると、孤食の進展、所得の減少や食料価格の高騰等により、健全な食習慣を持つ消費者とそうでない消費者が二極化するといった、食の二極化が起こっている。栄養素が少なく、安価なカロリーである脂質と糖分が多い食事を選択してしまうことによって、肥満と低栄養（タンパク質摂取不足等）の2つを同時に抱える等、様々な健康問題を引き起こしている。そのため、PFCバランス等を中心に実態調査を行うとともに、特にタンパク質の摂取量が不十分な場合における摂取のボトルネックの解析を実施し、食習慣改善に貢献する手法を開発する。

これら手法の開発を行うにあたり、実態調査等情報収集を行うが、収集した情報をAIやアルゴリズムも活用して解析し、手法のモデルケースを創出する。加えて、収集したデータや手法のモデルケース等を公開することにより、民間事業者による新たな製品、サービスの創出を促進する。

##### ② 達成目標

【2025年度末(ステージゲート時点)】

・パーセプションギャップの解消や食習慣改善に貢献する手法を開発するために必要な実態調査を実施し、データベースを構築する。【TRL5】

【2027年度末(第3期SIP終了時点)】

・パーセプションギャップの解消や食習慣改善に貢献する手法を開発する。【TRL6】

**③ 研究開発期間**

契約以降から 2028 年 3 月末までの予定。ただし、毎年度評価を行い、配分額を決めるため、後年度の予算は約束されるものではない。

**④ 令和5年度委託研究経費限度額**

【包括提案型】 178,000千円

【技術提案型】 ①の a 178,000千円の内数

b 178,000千円の内数

(※) 研究開発項目Eの限度額は178百万円であり、研究開発項目の限度額を超える場合は、研究費を調整していただきます。